

ヒルファディング 帝国主義論

L・コラコフスキー

宮尾政志 訳

2015 年 4 月

はじめに

本訳は、宮尾政志氏がおこなったものである。原著は、L・コラコフスキーの **Main Currents of Marxism** 第 2 巻で、**Oxford University Press** 1981 である。ポーランド語で書かれ、それを **P. S. Falla** が英訳した。その第 12 章第 14 節である。ヒルファディングの研究者は、この文章が少し変かなと思うかもしれないが、それは多分、元のポーランド語か原書英語のせいである。

私は、宮尾氏の訳稿に 1 カ所ほど手を入れ、点を打つなど読みやすくしただけである。

倉田 稔

本文

ヒルファディングの『金融資本論』には次の印象をもつ。変化した経済状況に適応させるためにマルクスの『資本論』のほぼ全体を書き直すつもりだったのではないかと。彼が詳述するのはマルクスの理論のうち、貨幣、信用、利子率、それに恐慌だが、最も重要なのがマルクス没後の世界経済の変遷に関する研究である。つまりこの変遷は資本の集中と結びついているが、一方でこの変化には「定性的」性質があり、初期の過程が単純に継続した、というようには記述できないのである。

議論の出発点は、価値論と平均利潤率論である。厳密な意味での価値は、換言すれば、具現化された労働時間は、直接表現することは不可能だが、価格間の量的比率として、交換において表現される。生産が利益に連動するという事実が意味することは、交換が「同一労働に対する同一の支払い」の原則に適合するのではなくて、「同一資本に対する同一利益」の

原則に適合するということである。つまり販売は生産価格で行われるわけであり、価値によってではない。商品の価値を直接に表わすことが不可能だということは、ロートベルトウスの社会主義の教義のユートピア的性格を想起させる。その社会では交換の基準として決められているのは個々の生産物ごとの標準労働時間である。

生産の動機としての利潤の支配は、自然に、資本の集中や、技術進歩を導く。技術進歩は、それ自体を資本の有機的構成中のうち不変資本の割合の増加として経済的に表わす、そして不変資本の内部ではまた、固定資本は流動資本よりも速く増加する。これが意味することは、投資済みの資本の移転は徐々に困難になる、そして、流動資本は生産の一部門から他に自由に移転できるが、固定資本は生産過程に組み込まれてしまう。したがって、もし株式会社や銀行の形態で、つまり大規模に動員させる手段が無ければ、平均利潤が発生することはたいへん困難なことである。ところで銀行の利害はいくつかの点で個々の資本家の利害とは異なっている。企業を市場から退場させることもある競争は、生き残った企業には好都合だが、銀行にはありがたくない。したがって銀行は顧客間の競争は避けようと目論み、同時に高い利益率に関心を寄せる。換言すれば、銀行は独占化された産業を作りだす傾向があるのだ。

独占体の生産の帰結のひとつは、交易機能の変化である。資本交換の集積の初期の期間は決定的な役割を演じる。つまりその期間とは資本主義の出発点であり、第一段階であり、信用システムのおかげで初期の資本集積はそれ自体に生産を従属させるのである。発展した資本主義経済では、従属は終焉し、生産と交換は分離する。その後資本が集積すると交換は自律性を失うか、あるいは経済社会の一本の独特な枝として余計な物にさえなるのである。したがって商業資本は減少し、商業資本が占める利益は産業資本に受け継がれる。商業資本は徐々にシンジケートやカルテルの代理人になるのである。

資本の集積は銀行の集積を導く。しかし相互関係的に資本の量が増えれば増えるほど銀行の自由になり、自分たちのために産業資本の集積をもたらすことがよりいっそう可能になる。したがってここに黒字の還流と今日呼ばれるものが現れる。銀行は資本家の準備資本と非生産階級の現金資産の大部分を蓄積する。つまりその結果として産業に利用される資本の量は産業資本の合計よりかなり多くなる。このことは産業にとって好都合なことだが、産業をより高い度合いで銀行に依存させることになる。「銀行資本、あるいはマネーの形での資本は、こうして現実では産業資本に形を変える。これを我々は金融資本と名付ける。」（『金融資本論』 iii 14 ）

産業のカルテル化の方向性を議論しつつ、ヒルファディングは、この過程に隘路が存在するか否かの疑問を呈するのだが、答えは否である。普遍的カルテルの形態での資本家的生産の全体が総ての生産的過程を意識的に規制することは想像できる。その状況で価格は協定的に決まるが、このような価格決定は全産出量をカルテル大資本家と残りの社会の間で分配するという単なる計算になってしまう。マネーは生産での役割を終えて、市場の無政府生は終息する。社会は依然、対立する階級に分断されているが、計画経済に支配される。ヒルファディングは、物事がこのように展開するとは言わない。しかし上記のことが資本の集中の傾

向だと言う。後年彼はこの予測が高い確率で起きると考えるようになった。社会主義に対する希望は無いとは推論しなかったが、社会主義は平和的収奪という手段によって、ほぼ構築された資本家が画策する機構に取って代わることができるという見解に傾いていた。

しかし、集積過程が、仮定したような絶対的形態に到達しないかぎり、資本家経済では恐慌は避けられなかった。つまり、生産は好況と不況の循環段階に突入せざるを得なかったのだ。恐慌の可能性は商品生産の条件そのものに固有のものだった。商品とマネーへの分離、信用の発展は、以下のことを意味した。販売は再生産の前提条件だという理由から、市場の困難性による破産の状況があり、破産がどの点でも自然な連鎖反応を引き起こすということである。それ以上に、生産の唯一の動機となる力である利益を増やすという衝動は、生来の矛盾を内包していた。すなわち、それは労働者階級の消費を制限する方向に動いてしまうのだった。このことは、恐慌は単に労働者の低い消費によって引き起こされるのではなく、ロータベルトゥスの追随者たちが望むような、単なる賃上げによって解消できるということは意味しなかったのだ。ヒルファディングはこう解説する。経済恐慌は循環の混乱であり、だが資本家の本質的な特性の混乱にすぎない。したがって循環法則それ自体は恐慌を説明しない、と。あらゆる産業サイクルは以下のような偶発的状況を伴って始まる。新市場と生産の新拠点の開幕、重要な技術の改良、そして人口増加である。以上の要因は需要の増加をもたらす。この需要は生産の他の分野に広がる。この生産はさまざまな経路で初期の生産に依存する。資本の崩壊の期間は短縮される。換言すれば、商人が投資しなければならない額は費やされる生産資本に関連して減少するのである。だが同時期の技術進歩を促進する状況では利益率は減少し、資本崩壊の期間は長びく。ある段階では拡大する生産は不十分な需要に遭遇して、新しい市場を追い求めなくてはならなくなる。一方、資本は有機的な構成が最高潮を迎えた部門に自然に流れる。そしてそれ故に、それらの部門での投資は他部門より大きくなり、利益率はより低い。この結果として生じた不均衡は、商品流通過程全体と対立する。つまり、恐慌は概ね、最も技術的に進歩した生産部門に最も容赦ない。これによって価格と利益下落の連鎖に陥るのである。付け加えるならば、好況の期間中、価格と賃金は上昇するが、商品の増加以上により急激に価格は増加する。つまりこれが増加した利益の条件なのである。それゆえ消費は生産と歩調を揃えることができないのであり、ある瞬間に体系は崩壊する。その瞬間に、好況時の銀行信用への大きな需要のおかげで、銀行は信用を与えることによって不均衡を均衡させることができない。当座のマネーを求める緊急の需要が発生するが、生産者はそのマネーを得るために自らの生産物の現金を実現することによってしか得られない。皆すぐにでも売りたいが、結果として誰も買わない。すなわち大量の在庫が積みあがる間に値崩れする。そして結末は、大量の破産と失業である。

資本家の代理人たちの相互依存のお陰で、一国の恐慌が輸入規制という方法で他国に影響する。そして不況がじわじわ世界的に広まる。被害をいちばん受けないコンツェルンは莫大な資産を持つ企業である。なぜなら、それらの企業は倒産する前に徹底的に生産を削減できるからである。それゆえ恐慌はそれ自

体が資本の集中の原因になる。なぜなら恐慌は小さな製造業を消滅させる傾向があり、巨大な持ち株会社を市場に放つからだ。

金融資本の統制はまた国家の機能に変化をもたらし、ブルジョア・リベラ・ルイデオロギーを衰退させる。金融資本が自由に活動できる範囲の大きさは、更に重要な事柄となる。金融資本が要求するのは、政治的・軍事的手段によって外国の競争から金融資本を守り、資本の輸出を促進するような強い国家である。帝国主義は資本の集中と生存競争の自然の帰結であり、利益の水準を高める。理想状態とはもちろん、安価な労働力を供給する新市場や領土を支配する政治的独裁を達成した大都市のような状態である。それゆえ金融資本は帝国主義の政策を支え、世界中での資本家的生産の広がりを支えるのである。リベラル・ブルジョワジーの武器としてのイデオロギーは時代遅れである。自由貿易、平和、平等、博愛主義の理想は、金融資本の拡大を容認する政治主義、つまり人種主義、ナショナリズム、国威発揚、軍事国家化に取って代わられる。

以上のような進展は社会の階級構成に重要な効果をもつ。古くて、時には絶滅寸前の争い、つまり上下ブルジョワジー間の、都市と地方間の、あるいはブルジョワジーと地主間の争いは、どんどん消えてゆく。ヒルファディングは大資本家たちの振る舞いを次のように描写する。大資本家たちは中産階級の生産活動全般を支配すると、社会が、労働者とその他大勢の階級分裂に更に向かう傾向をもつ社会という利害の統一のようなものを作りだす、と。もはや小ブルジョワジーは大規模な資本に許されたこと以外には未来が見えなくなっていて、自分たちの利害とカルテルの利害を同一視するように強制されるのだ。同時にこの階級は帝国主義や人種主義、力と政治的拡大の理想をもっとも受けやすい階級である。技術進歩は労働者階級の人口を最初は相対的に最後は絶対的に減少させる傾向があり、一方、経営者、技術者、生産管理者はますます求められる傾向にある。現代ではこれらの階級は、経済分野だけでなく、観念の分野でも、明らかに資本に依拠し、反動的政治行動に援助を与えている。しかし彼らの立場は脆弱だ。つまり彼らの才能を求める需要は供給より少ないし、彼らの人数を制限して減らすためのマネージメントの技巧を合理化するような傾向がすでに存在するのだ。賃金生活者である彼らの立場と利害が労働者階級と同じだと気づくとき、いつの日かこの階級のメンバーがプロレタリアートと運命を共にすることを期待できるかもしれない。

金融資本の支配は、階級対立を減らさずに、より高いレベルにまで引き上げる。一方同時に、いわば、中間政治勢力を排除することによって、また、金融寡頭政治とプロレタリアートの敵対勢力を双方に対して据えることによって階級構造を崩す。プロレタリアートの経済組織は、労働力を売るためのより良い条件を求めて闘いながら、ブルジョワ社会の枠組みを超える政治組織を自然に発展させる。金融資本と国家機構との癒着は、かなり明白なので、

プロレタリアートと全体の既存のシステムとの対立をほとんどを意識していないプロレタリアートも目覚める。もちろんプロレタリアートは、帝国主義に対して、自由貿易とリベラルな経済へ回帰するようという反動的で無意味な叫びには反対できない。同時に、帝国主義が現在のシステムの避けられない傾向だと認識しつつ、帝国主義の究極の結果がプロレタリアートの勝利をもたらすのだが、プロレタリアートは帝国主義を支持することができない。帝国主義にたいするプロレタリアートの答えは唯一、社会主義である。帝国主義と金融寡頭制は政治的対立を大いに助長し、社会主義への展望を開く。それはプロレタリアートの意識を変革する助けとなる戦争や政治的崩壊が起こることによってだけでなく、さらに資本主義の下で可能な最大限の程度まで生産の社会主義化を成し遂げるからである。金融資本は生産の管理を所有と切り離し、支配の一体化を目的とする巨大な資本蓄積を生み出した。したがって国家による金融寡頭制の接収は、プロレタリアートが権力を掌握するやいなや、比較的簡単な作業となる。国家は、とにかく現在では金融大資本家に完全に依存している総ての中規模・小規模の企業を接収する必要はないし、するべきではない。金融資本はすでに大部分の収奪を実行してきた。国家は生産をコントロールするためには大銀行と大産業企業だけを接収すればよい。そして、もしそれが労働者階級の国家であれば、その経済力を公共の利益のために使うだろうし、私的な利益を増やす目的には使わないだろう。単純な全体的接収は経済的無駄であり、政治的に危険である。

ヒルファディングは論文の最後で「歴史法則」を定式化する。「階級対立に基礎を置く社会組織の中では、支配階級の権力が最大限の集中に達したときに限り、社会の大変革が起こる」（『金融資本論』、V、25）。この段階には、彼の予測では、すぐにブルジョワ社会によって到達するだろうし、したがって、このことがプロレタリアート独裁の経済状況を創ることになる、と。

ヒルファディングの研究は、オーストリア学派の他のどの研究よりもマルクス主義の発展に多大な影響を与えた。彼の研究は、事実、世界経済のポスト・マルクスの潮流の、マルクス主義的観点からの、科学的分析による最も包括的な試みだった。ヒルファディングは早くから、資本家の所有と生産的経営の分離の重要性を指摘し、経営者と技術者の役割の重要性が徐々に増すことを指摘した一人だった。彼はまた、新しい時代の資本の集中の経済的、政治的重要性に関する明晰な要約を著した。

彼の論文は「古典的」マルクス主義の観点から書かれた。すなわち、集中は最終的に階級分裂に至り、産業プロレタリアートは資本の世界を破壊する破城槌である、という観点に基づいている。しかし彼はこの分析で、その後にレーニンが下したのと同じ結論には至らなかった。ヒルファディングは資本主義を、ブルジョワジーとプロレタリアート間の階級対立の悪化によって破壊されるのかもしれない世界規模のシステムと捉えていた。レーニンは同様の世界観から、帝国主義の矛盾は経済的進化がより進んだ時点ではなく、社会衝突が最も集中し複雑化した時点で分解に至ると結論した。他の非プロレタリアートの要求、特に国民と農民の要求は、緊張の貯蔵庫を構成すると表現されなければならないし、金融資本の重要な

中心部よりも、むしろ非難と意見の相違がもっとも多い所で革命が起こる可能性が高い。

ヒルファディングは、ローザ・ルクセンブルグ、パンネクックや、西ヨーロッパ左翼社会主義者全体が信じたようにマルクスの意味でのプロレタリア革命を信じていた。レーニン
は、党に主導されプロレタリアートに支持される革命を信じていたが、それに加えて、他の
人々の要求を代表すると主張し、また十分な理由を利用するという衝動を要求していた。
(了)

訳者など紹介

宮尾政志	小樽商大商学士
倉田 稔	小樽商大名誉教授